法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-06-01

幕末の日本とフランス ： フランス外務省の日本に関する調査,徳川昭武のフランス語日記を中心に

阪上, 脩

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
53
(開始ページ / Start Page)
69
(終了ページ / End Page)
76
(発行年 / Year)
1985-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005329

Hosei University Repository

幕末の日本とフランス
フランス外務省の日本に関する調査，徳川昭武のフランス語日記，を中心に

阪上　脩

1858年10月9日に日仏修好通商条約が結ばれたが，その前後に，フランス外務省は幕末の日本のことを調査しており，その報告書や外交文書などがパリの外務省外交資料館に保存されている。それらのなかには当時の大名の名簿や幕府の政治形態を報じたものもあり，日本を議会制君主国のように考えていたと思われる報告も見られる。それによれば，京都に君主がおり，江戸に議会があると報告されている。(資料番号1 Correspondance politique. Japon)

これらの報告書や書簡を見ると，フランス人が当時の日本をどのように見ていたかを知ることができ，幕末の日本について新たな光をあてることが出来るかもしれない。

つぎに揚げるのは，仏外務大臣からグロ男爵（全権大使）にあてられた手紙である。グロ男爵は日仏修好通商条約締結を推進した中心人物である。彼は当時上海におり，日本に条約締結を迫るべく準備をしていた。既に英国は5隻の船を連ねて日本に向おうとしていたが，フランスはなかなか軍艦の準備がととのわなかった。(アメリカは既に和親条約を結んでいた。) フランス艦隊は，広東やインドシナに軍艦を割かねばならず，日本派遣までは手がまわりかねた。しかし日本に開国を迫るには，軍艦で威嚇する必要があり，グロ男爵としては，十分な艦隊をととのえて日本に赴きたいところであった。この手紙には外務大臣から『江戸幕府に強い印象を与えるに十分な艦隊をともなって行くように』と書かれている。

グロ男爵（全権大使）あての手紙　1857年5月16日（抜粋）

Il sera indispensable que vous ne vous présentez au Japon qu'accom-

Hosei University Repository

pagné d'une force navale suffisante pour faire impression sur la cour de Yedo.

グロ男爵はこの手紙の内容をフランス艦隊のジュヌイ元帥に伝え，軍艦をまわしてくれるように頼むが，結局戦艦ラプラス号，哨戒艦プレジャン号，汽船レミ号の3隻しか割いてもらえず，やむなくそれらを率いて江戸へ向い，日仏修好通商条約を結ぶことになる。

幕末の日本国内に関する調査

外国人が日本の内陸部を旅行出来るかどうか。これが当時日本に来たフランス人にとって重大な関心事であった。それまでは船で長崎とか江戸に来ており，通商条約は結んだものの，国内へ安全に入れるのかどうかが問題であった。のちに駐日総領事になるベルクールはそのような時に日本の国内事情を調べ，本国に報告している。それによれば，日本は半封建的なシステムで統治されており，内陸部に入るためには地方政権の課する条件を満さなければならない。（地方政権は中央政府と関係をもちながらも独立しているのが多い）ベルクールは，幕府と各藩との関係をこのようにとらえていた。

日本の内陸部を旅行するには，多くの兵隊と家僕と駕籠かきなどを従えねばならず，ひとつの軍団ほどの人員が必要であり，その1人当り1日250フラン支払わねばならず，多大の費用がかかるとベルクールは報告している。これはおそらく大名行列のようなものを従えないことには，外国人は日本国内を旅行できないということであったのだろう。

駕籠のことをNorimon（乗りもん）と書いており，エミール・ギメのPromenades japonaises（邦訳「ボンジュール　かながわ」）にも駕籠のことをNorimonまたはKangoと書いている。[1)]

英国の初代駐日公使オールコックが1881年に長崎から江戸までの国内旅行をした際にも，多くの役人，目付，通訳などを従え，行列の先頭では『下におろう』と呼ばわりながら進んだと記録されている。[2)]

Hosei University Repository

ベルクール（のちの駐日総領事）の報告書（抜粋）1859年5月14日
（これらの報告書はすべて手書きの書簡である。）

L'Empire du Japon qui paraît régi, dans ses subdivisions provinciales par le mécanisme d'un système quasi féodal, n'est accessible à l'intérieur qu'à la condition de remplir, vis à vis des autorités locales, (si souvent indépendantes sous beaucoup de rapport, de gouvernement central) (.... .....)

Si on rapporte aux récit des hollandais qui ont été admis à se rendre de Nangasaki à Yeddo par la voie de terre, la durée de excursion serait d'environ 45 jours pour un parcout de 200 à 250 lieues (M. Dunker Curtius, commissaire hollandais au Japon a récement effectué ce trajet dans le laps de temps ci indiqué)

Ce voyage comporte un appareil exterieur assez dispendieux.

C'est ainsi que le Gouvernement Japonais est dans l'habitude (du moins il en été ainsi jusqu'à présent) d'imposer à ceux qui sont autorisés à voyager à l'intérieur du pays, l'obligation de recevoir, sous prétexte de sureté personelle, une escorte militaire assez nombreuse et donc les dépenses sont à la charge de ceux qui la necéssitent, formalité aussi gênante qu'elle est onéreuse.

Au Japon, paraît-il, les frais de séjour des voyageurs étrangers sont reglés par les lois suivant le degré d'importance du personnage qui s'arrête dans les établissements public ou gouvernementaux. On lit dans le journal du voyageur hollandais Koempfer le résumé très détaillé des dépenses de la mission chargée de se présenter à Yeddo à l'occasion du renouvellement d'une convention commerciale.

L'escorte qui fut donnée en cette circonstance aux hollandais se comptait d'un grand nombre d'officiers, de soldats, de domestiques et de porteurs de palanguins (norimons) et l'ensemble de ce personnel obligatoire formait comme une légion d'individus dont les dépenses ordinaires atteignaient le chiffre de 50 Rigodolers par jour (d'après Koempfer 5 Rigodolers valant environ 1 Liv. Sterling-soit 10 Liv. St. par jour ou 250 francs.)

Hosei University Repository

日仏修好通商条約の条文は，フランス語で書かれたものと日本語のものとが残っているが，その翻訳もはじめの頃は大まかなもので，正確な翻訳とは言いがたいものである。むしろその大まかな翻訳の中に当時の日本人のものの考え方がよく出ていて，西欧文明が入る前の日本人の原型を見ることが出来る。例えば第１条に，『仏蘭西国と日本国と世々親睦なるべし』とあるが，フランス語の条文では，『フランス皇帝とそのあとつぎ及び後継者と日本皇帝とのあいだには，永久の平和と恒常的な友情があるだろう』と書かれている。当時の日本人にとっては『親睦なるべし』で十分わかることであり，『以心伝心』という言葉があるように，いろいろ文書にして規定しなくてもわかってしまうのであり，言葉を厳密に定義して条約文をつくる習慣もなかったのである。国家意識にしても，日本国という国家意識はあるのだが，その主権は徳川幕府にあるのか，天皇にあるのか，規定はない。これはのちになって訳文がつけられ，日本皇帝は日本の大君ということになる。その背景には幕末の政治情勢があり，衰退して来た幕府と天皇との関係もあり，日本皇帝としてしまうと，天皇を意味し，幕府は日本の代表でなくなるので，そこのところは最初はあいまいにしておいたのかもしれない。そしてのちになって日本皇帝というのはやめて，大君としている。実際10年後のパリ万国博の際には薩摩藩が独立国の体裁で出品したため，日本には政府が二つ以上あり，ドイツのような連邦国だとフランスの新聞に書かれた。[3)]

条約文の日本語とフランス語をくらべて感ずるのは，フランス語は現代とほぼ変っていないが，日本語は恐ろしく変化してしまっていることである。19世紀の日本語を読むには，特殊な訓練を必要とする。一方19世紀のフランス語は，現代にいたるまで，日本語ほどはげしい変化はしていない。

徳川昭武のフランス語日記

日仏修好通商条約調印の10年後，15代将軍徳川慶喜の弟昭武は，パリ万国博覧会に将軍の名代として派遣された。当時昭武は満14才の少年であり，フランスに向う船の中でフランス語の勉強をはじめ，パリではフランス人教師について学び，フランス語で書いた日記を残している。この日記は，幕末期の日本人がはじめて外国語を修得しようとした記録として大変興味深いものである。ま

Hosei University Repository

ず日本語で書かれた文法書や教科書などなく，予備知識があまりないところへいきなり外国語が入ってきていることに注目しなければならない。現代においては，中学で教科書や文法書を使って英語を学びはじめるのがふつうで，外国語に関する情報が非常に多くあり，白紙の状態で外国語に出会うことはなく，日本人が異質な言語に出会った際の素朴な反応がわからない。その点で，このフランス語日記は，外国語に関する情報の少ない江戸時代の日本人の外国語理解の仕方がうかがわれる。

さらにこの日記には下書きノートがあり，別人の筆跡で添削がほどこされている。このとき同行していた日本人でフランス語に堪能な人物によるものと考えられるが，添削が必ずしも正しくないので，幕末期の日本人のフランス語知識をうかがうことが出来る。この人物が，小出湧之助だろうという推定については，仏学史学会誌第12号に発表した。

この日記は，1868年8月2日からはじまり，10月15日になって帰国の途につくところからは，下書き帳のようなものに書かれている。前半の日記は仏人教師が添削したものであり，そのことについては上記学会誌12号に書いたが，10月15日以降の日記は，パリを離れ，ビアリッツに寄ってマルセイユに行き，船に乗り，日本につくまでのものである。本稿ではこの下書き帳の方を扱う。

代名動詞は理解しにくいものであったらしく添削箇所が多い。代名動詞は日本語と構造が全く異なるため，現代においても理解しにくいものであることに変りはない。例えば『私達は寝た』というのが1868年10月16日の日記に出てくるが，下書きには Nous avons couchés と書かれており，別人の筆跡で Nous nous sommes couhés と直してある。これなど日本語のどこをたたいても，ここに nous を入れなければならない理由など出て来ない。したがって落しがちになるのである。また当時の日本人の書いたフランス語にも代名動詞の誤りが見られる。慶応元年（1865年）開成所の助教であった入江文郎の書いたつぎのようなフランス語がある。

Monsieur Ytchicawa Bunquitchi.

Depuis que j'eus l'honneur d'être connu de vous il y a cinq ans dans le collège Francais de Caissaijo, je m'y ai (ママ) attaché avec vous, j'ai eu un (ママ) grâce à vous communiquer ma faible étude et je m'ai (ママ) étonné toujours de

Hosei University Repository

votre conception vive et de la grande capacité. (.....)[4]

文中に二箇所代名動詞の複合過去の誤りがあり，入江はここに代名動詞を使わなければならないことは知っていたが，その理解過程が不思議で，もし入江がフランス人から教わったまま丸暗記していたのであれば，こうはならない。代名動詞を理屈で知っていて，それを応用して複合過去を作り出したのではないかと考えられる。慶応元年には，仏語明要などの辞書類はあったが，日本語で書かれたフランス文法書はなかったのではないか。

昭武日記には，代名動詞の過去分詞にｓがきちんとつけられており，このような代名動詞の規則をどのようにして理解したのかはわからないが，過去分詞にｓをつけるくせがついてしまって，avoir＋過去分詞にもｓをつけている例が見られる。1868年10月15日の日記に（.....）nous avons passés[5]（.....）と書かれている。他の avoir＋過去分詞は，例えば nous avons dit などはきちんと書かれている。また être＋過去分詞の場合も正しく書かれている。これなどはどのような説明を聞き，どのように理解したのであろうか。自動詞とか目的語とかいった日本語のない時代であるから，どの場合にｓをつけ，どの場合にはｓをつけない，というようなことを理論的に説明することはむずかしい。

10月18日の日記には，（.....）nous avons trouvés ses messieurs. というように過去分詞にｓがつけられている。この例から考（ママ）えると，目的語が複数ならばｓをつけると理解していたのではなかろうか。とすると目的語という言葉なしに概念だけ理解していたことになる。

現在分詞は，やはり理解しにくかったらしく，10月15日の日記には descendant と書かねばならないところが descendent となっており，また同月20日には，passant のところが passe となっており，passant と直してある。直した人は現在分詞を十分使いこなせた人らしいが，15日の descandent のほうが直されていないのはどうしてだろう。この語尾の ent は，三人称複数現在の語尾であり，複数については，日本語ではいちいち動詞を変化させたりしないものだから，やはり見落しが多い。20日の日記では，関係代名詞を使った節のなかの動詞が単数形になっており，あとから ent がつけ加えられて複数形に直されている。これを見ると，添削をした人は，関係代名詞の先行詞を十分理解しており，先行詞というような日本語のなかった時代に，こういう概念がよ

Hosei University Repository

く理解出来たものだと感心させられる。

さらに添削をした人がフランス語を十分ものにしていた例をあげると，19日の日記につぎのような文章があり，添削がほどこされている。

(et de là)
(.....). Nous sommes allés visiter le Notre Dame de la Garde où
(regardé le beau spéctacle qui s'étendait)
nous avons sous nos yeux dans toute la ville de Marseille (.....).

行間に書き加えられている文章はフランス語に慣れた文章だといえよう。先述の代名動詞も使われており，半過去も使われている。半過去については，このような動詞の時制は日本人にとって理解しにくかったらしく，日記の他の箇所においても誤りがある。

しかし明治8年から9年にかけて筆記されたポアソナード答問録のフランス語とくらべると，この日記ははるかに誤りの少ないものである。やはりフランスに行き，個人教授について直接ならっていることが，大きな違いを生んでいる。とにかく文法書や参考書などなく，いきなりフランス人から学んでいる点が，現代のように学校で教科書を使って学びはじめるのとは大変異なっていることに注目しなければならない。

また日仏修好通商条約の交渉にあたって，通訳をしたといわれるメルメ・カションにしても，日本人と接することで手さぐりで日本語を習得していっているのである。

長崎から江戸までの日本国内旅行をした英国駐日公使オールコックにしても，当然のことながら日本に関する情報は非常に少く，実際目で見，肌で感ずることで日本をつかんでいっている。従って京都に関する情報が少いため，外人が京都に入ることの危険がわからず，つきそいの幕府の役人を手こずらせている。役人は，京都には浪人が集っており，不穏な形勢で，護衛がむつかしいことをしきりに説くのだが，オールコックは，それを役人根性による言いのがれだというように解釈している。オールコックには尊皇攘夷といったことや勤王の志士が京都に集っていることなどなかなかわからなかっただろう。[6)]

フランス初代駐日総領事ベルクールにしても，日本国内旅行に関する情報は

Hosei University Repository

オランダ人から得たものだけで，非常に少く，しかもこの同じオランダ情報をオールコックも聞き，あとになってオランダ人の言うたような多大の費用を使わなくても日本国内旅行は出来ると，情報修正を行っている。[7]

このように日仏，諸外国ともに少い知識で相手を知ろうと情報集めをやっており，それらの資料が多く残っている。今後それらの報告書や書簡などが調べられることで，諸外国の日本観がどんなものであったか，日本人の外国観がどのように形成されて行ったか，を知る手がかりとなって行くであろう。

注

1) Emile Guimet (1838—1918) フランスのギメ博物館の創立者。明治9年に来日し，紀行文を残している。
邦訳「ボンジュール　かながわ」(青木啓輔訳　有隣新書) p. 55
2) Alcock 著 The capital of the tycoon 邦訳「大君の都」岩波文庫 (中) p. 327 p. 407
3) 高橋邦太郎著「花のパリへ少年使節」三修社　p. 59
4) 宮田仁著「フランスに魅せられた人びと」カルチャー出版　p. 99
5) avoir＋過去分詞の場合に s をつけることはあるが，それは複数目的語が前に来ているときであり，この例はそれにあたらない。
6) 「大君の都」(中) p. 375
7) 同書　p. 325